

(3) 土佐の守護代・細川氏

細川氏の支配 南北朝の内乱が続いている間に、諸国の守護は各地に勢力をのぼし、地方豪族をしたがえて、大名化していきました。細川氏も足利一門の最も有力な守護大名として、山陽・四国・近畿地方にかけて、8か国ばかりを支配していました。土佐は、のちに細川氏の一族が守護となりましたが、土佐にきたのは、一門の細川頼益と子孫で、守護代として、守護領国の経営にあたりました。

頼益は「弓馬の名誉、和歌の達人なり」といわれた武将で、1380年ごろ土佐にきて、香美郡田村庄（南国市）に館をかまえ、細川本家や阿波の細川氏と連絡をとりながら勢力をうちたてていきました。田村は、物部川下流の西岸にあって、昔から開けた地でした。また、四国の平定に功績のある細川頼之の墓がある京都の地蔵院の所領でしたから、細川氏は、田村に守護代の館をおいたのです。

館は、城詰一反余歩を中心とし、館城内に菩提寺の桂昌寺もかまえ、約4町5反（4.5ヘクタール）～5町（5ヘクタール）の面積

田村城跡 城八幡（南国市田村）



をもった平城形式の複濠複郭式の館城であったといわれています。当時の有力な領主の館が2町であったことを考えると、細川氏の館の大きさがわかります。

桂昌寺は、細川勝益が頼益の冥福を祈って建てた日蓮宗の寺院ですが、江戸時代5代将軍綱吉の生母が桂昌院とい



細川頼益の墓

だったので、はばかって細勝寺と改め
られました。現在、寺には、頼益の
墓が残っています。

細川氏は、はじめのころは土佐の

国内を十分に統一することはできま
せんでしたが、頼益・満益・持益の時代にかけて、香宗我部・長
宗我部・山田氏などをはじめ、地頭や土豪を家臣として、しだいに
勢力をのばしました。五台山の竹林寺や吸江庵、東の香美郡大忍荘
(香美市物部町・香南市香我美町)も支配するようになりました。

細川氏の影響力は強く、堺商人の出入りもあったようです。中
でも堺を起点として浦戸(高知市)・下田(四万十市)に寄港し、薩
摩の坊津をへて明へ行く南海航路を開いたことは、両港を繁栄させ、
貨幣経済の発達に役立ちました。

応仁の乱 四代勝益の時代になる
と、勢力はしだいにおとろえて、地頭
や土豪が現地で力を持ち、自立するよ
うになってきました。このような時に、
応仁の乱がおこり、勝益も土佐をはな
れて京都に去っていきました。1507
年に細川勝元の子政元が死んでから、
土佐の国は、戦国争乱の時代に入った
といわれています。

吸江寺は、1318年夢窓疎石が土佐にやって
きて五台山のふもとに開いた臨済宗の寺で、当
時は吸江庵といわれていました。室町時代以来、
土佐の文化の中心であり、多くの土地が寄付さ
れて栄えていました。

吸江庵跡(五台山)

